誤算だった。
この広間に・・・庭のような闘技場に入った時から、自分は焦っていた。
結界が張っている時点で、もっとよく確認するべきだった。

“相手の動きを見極めてからでないと、攻撃をしないのが貴様の悪い癖だ。”

呆れ気味に笑う仲間の姿が頭をよぎる。
敵は俺が目的だった。
味方に引き入れることが目的だった。
それがわかった時点で、考えなかった俺のミス。
魔界で人間は仮死状態になる。
そんな固定観念を持ち続けていた。
魔界の３７部地帯と呼ばれる場所は、その住人ですら悪性の瘴気でやられてしまう。
この建物に結界を張っているからこそ、毒ガスにやられずにすんでいる。
結界は、【守る役割】もあれば、【隠す役割】をする。
俺はそれを忘れていた。

「そんなことしないで！！！」

聞いた事のない戸惑いの声。その声で、俺の頭は真っ白になった。

（まさか――――――――――！！）

覚悟はしていたが、その衝撃は俺には強かった。

「そんなの・・・私の知っている秀ちゃんじゃない・・・！！」

強すぎる衝撃。１番聞きたくなかった言葉。

「私の知ってる、南野秀一君じゃないよぉ・・・！！」

こんな思いをするのは初めてだった。

これが、胸が焼け付くという感情なのだろうか。

「麻弥・・・・・！？」

声と共に、その姿を見て、俺は声を漏らした。
捜していた女の名を、無意識のうちに呼んでいた。

「秀・・・ちゃん？」

「麻弥・・・・！！」

自分を呼ぶ声に、俺はもう１度その名前を呼んだ。
その後で彼女は問うてきた。

「・・・私の声が・・・聞こえるの・・・秀ちゃん？」

涙を流しながら、俺に尋ねる麻弥。
その言葉で、すべてのことを理解した。
麻弥は、俺がこの闘技場に来る前からいた。
結界の中に閉じ込められ、ずっと俺の様子を見ていたのだ。
外から姿は見えず、中からは外の様子が見れる結界の中で。
俺はその結界を、敵が逃げ込むための場所だと勘違いした。

（麻弥がいるとも知らずに・・・！）

【南野秀一】しか知らない麻弥の前で、俺は【妖狐・蔵馬】の一面を見せた。
麻弥は、俺が妖怪共を殺す姿を見たのだろう。
いや・・・ブラック・ナイト達によって、見せるように仕向けられたのだ。
そして俺は、そんな敵の罠にハマッた。
麻弥の前で、残酷な姿をさらした。

彼女はそれを見た上で俺に言った。
「やめて」という言葉を麻弥は言ったのだ。
だから俺も、それに答えなくてはいけなかった。

「・・・聞こえるよ・・・麻弥。」

かける言葉ないというのは、初めての経験だった。
本当になにも浮ばなかった。
ただ、彼女の言葉を拾い上げて、答えるしかなかった。

「秀ちゃん・・・。」

黙り込む俺に、彼女は俺の人間の名前を呼ぶ。
俺は、できるだけ平静を装いながら彼女を見た。
改めて見た麻弥の姿に、俺は再度、強い衝撃を受けた。
岩の洞窟の中に、彼女は座りこんでいた。
金色のような薄い黄色ドレスを着た麻弥。
ドレスは、胸の谷間を強調し、全体的にふわっとしていた。
装飾品は、トルコ風の鮮やかな宝石が使われ取り、化粧直しもされていた。
化粧は、同窓会で麻弥がしていたシンプルなものではない。
妖艶ながらも、あどけなさを感じさせるものだった。
特に、ピンクで彩られた唇が俺好みだった。
思わず、食い入るように麻弥を見つめて気がついいた。
彼女の両足に、奴隷用の鎖がつながれていたことに。

「麻弥に何をした！？」

芽生えた怒りを、蔵馬は敵にぶつけた。

「まだ、なにもしていませんが？」
「彼女の足に付いているのはなんだ！？」
「逃げられないように、鎖はつけましたが。」
「わざわざ、奴隷用の鎖をか！？」

涼しい顔で答えるブラック・ナイトに、冷静な男は怒りを露にした。

「さっきの手紙にしても、貴様が無理やり書かせたんだろう！？彼女の指を切り、その血で文字を・・・俺への手紙を書かせたのか！？」
「違うの、秀ちゃん！」

点火した蔵馬の怒りは、その言葉によって鎮火される。

「麻弥！？」
「違うのよ・・・・・秀ちゃん。ドレスを破いて、指を切ったのは・・・・・私が自分でしたの。」
「なっ・・・何故そんなことを！？紙をもらえなかったのか！？」
「妖魔で出来た手紙は、嫌だそうですよ。」

麻弥の代わりに、ブラック・ナイトが答えた。

「彼女は、我々が用意した妖魔では、手紙を書けないと言いましてね。下等な妖魔２匹を助けるために、服の裂き、グラスを割って、自分の指を刺したんですよ。」

（血の血判書を書かせようとしたのか・・・！）

ブラック・ナイトの言葉に、蔵馬は顔をしかめる。
血の血判書と言われるその手紙は、手紙とペンの姿をした２匹の妖魔によって作られる。
２つの命を使って作られた手紙は、必ず実行されなければいけないという強い怨念が込められている。
魔界の住人でも、それを行うのはわずかな者で、主に術師などが行う術的な要素があった。

「麻弥や俺を呪い殺すつもりだったのか！？」

その手紙を書いた者も、送った者も、術師でなければ、なんらかの災いを受ける。
人間界で言えば、呪いの手紙・不幸の手紙とも言えた。
憎々しく聞く蔵馬に、相手は冷静な声で返事をする。